

ペロ活　く舐められて、乱されてく

ショートストーリー　京の過去と未来

本編トラック3の直後

「お兄ちゃん、今日、機嫌良くない？」

目の前でパフェを頬張っていた妹が突然そんなことを言った。視線を落としていたスマホから顔を上げ、表示していたメッセージアプリをとっさにオフにする。

「はっ、俺が？ ……なんで？」

「んー、さつきから鼻歌うたってるし、それに口元が緩んでる気もする。なんかいいことでもあった？」

そう言われ、つい先ほどまで一緒にホテルにいたお姉さんの顔が思い浮かんだ。

「いや、別に何も……あつ、臨時収入があったって

言ったでしょ。だからだよ」

妹には悟らせないように、何気なさを装って言う。

「ふーん、そういうことかー。まあ、だからこのパフェにも連れてきてくれたんだもんねー。このパフェ、見た目もキレイで味が美味しいって話題になったから食べてみたかったんだ。あつ、お兄ちゃん、苺食べる？ —— はい、あーん」

目の前に差し出された苺を頬張る。

「どう、美味しい？」

「っ……うん、たしかに美味しいかも」

少し酸味のある苺と生クリームの甘さがちょうど良くて、女子高生たちが騒ぐ気持ちもわかるような気がした。

「それより、学校案内もらってきたんでしょ？ 早

く見せて」

「う、うん……」

妹が隣の椅子に置いていたバッグからのろのろとパンフレットを取り出した。渡された冊子に目を通していると、前方から心配そうな視線を感じる。

「入学金が20万、授業料が55万、その他の費用が70万か……」

「うん……他に、教材費とか調理器具の費用とかもあるんだよね。あと実は海外研修に行く費用も積み立てておかないといけなくて……」

「そっか……」

（はあ、やっぱりそれなりにするよな）

そう考えているのが妹にも伝わったのか、

「ねえ、お兄ちゃん。やっぱり私も高校出たら働く

よ……それで稼いでちゃんと自分のお金で……」

「そんなこと考えなくていいよ……その話は何度もしたでしょ。進学にかかる費用は全部兄ちゃんが出すって——それでパティシエになって美味しいケーキ作ってくれるって言ってたじゃん。俺、それ楽しみにしてるんだけど」

「っ、だけどさ……」

「あー、あとカステラも作ってよ。母さんが誕生日ケーキ代わりによく作ってくれてたヤツ」

「……カステラだったら、すでに作れるよ。お兄ちゃんの好物なんだから……でも、わかった。早く夢叶えて、お兄ちゃんにたくさん作ってあげる」

「うん、俺が飽きるまで作ってよ」

「……ありがとう、お兄ちゃん」

「いいから、それ食べて、早く帰るよ」

「うん……パフェ美味しいね」

妹の頭を軽く小突いて、それから勢いよくパフェが口の中におさまっていくのを眺めながら、頭の中でお金の算段に思いを巡らせていた。

父親がいて母親がいて妹がいて仲の良い家族だと思っていた。それが全て崩れ去ったのは、中学に上がったばかりの頃で、突然父親が家を出て帰ってこなくなった。

「ほかに女ができて出て行ったのよ」

母親が妹である叔母さんとそう話しているのをこっそり聞いてしまい、子どもながらに父親はもう帰ってこないんだろうとわかった。

それからは3人で暮らし、母親が一人で俺たち兄妹を育ててくれた。父親がいなくても、裕福でなくとも、幸せで温かい家族にしようと、それぞれが努力をしていたし、少なくとも俺はそうしているつもりだった。だけど、俺が中学3年の時、今度は母親が家を出て行った。俺たち二人を置いて……。

今になって思い返すと、あの頃の母親は宙を見てボーっとする時間が多く、話しかけても聞いているのかわからないような状態だった。

（大変な思いをしたし、何もかもリセットしたい気持ちだったのかもしれないね）

そう思うと母親を恨む気持ちにはならなかった。それよりも泣きじゃくる妹を抱きしめ、これからは俺が守っていくんだと誓い、そのことで頭がいっぱ

이었다.

二人きりになった俺たち兄妹を引き取ってくれたのは叔母さん一家で、急に厄介者が増えたのにも関わらず不自由のない生活を送らせてくれた。それで高校にも通わせてもらい卒業もできたし、叔父も叔母も俺が希望するなら大学に行く費用も捻出してくれると言っていたけれど、そこまで世話になるわけにはいかない。二人は本当によくしてくれたし、本当の家族と思ってくれていいと言われていた。すごく感謝をしているけれど、やっぱり甘え続けることはできないと、俺は高校を卒業すると同時に家を出て一人暮らしを始めた。今はまだ妹だけは叔母の家に住まわせてもらっているけど、パティシエに

なるために専門学校に通いたいという妹の進学費用、それだけでなくこれからの生活費もできるだけ自分で工面したくてお金を貯めている。

(とは言っても、学費と二人分の生活費か……現実
はなかなか厳しいんだよね)

叔母さんの家に帰る妹と別れてからも、今後どうするか悩みは尽きなかった。けれど妹の夢は絶対に叶えさせてやりたい——それを思えば自分を犠牲にすることすらいとわなかった。

◇ ◇ ◇ ◇

「京くん、お願い！ モデル……やってくれない？」
仕事で忙しかったお姉さんに急に呼び出され、久

しぶりに会うなりそんなことを言われた。

「えっ、俺がモデル？ お姉さん、何言ってるの？

俺、身長170センチしかないんだよ。モデルとか無理でしょ」

「モデルって言ってもファッションの方じゃなくて、お願いしたいのはメイクモデルなんだ」

「えっ、メイクってことは、お姉さんの会社のこと？」

お姉さんに呼び出されたオフィスに化粧品のポスターが貼られていたことや商品の箱がたくさんあつたのを思い出す。

「うん、そう」

「へえ……メイクモデルって……それってメンズ化粧品かなんか？」

「ううん、それが女性向けなんだけど……」

「はっ？ えっ？なんで俺が……」

「実は新しいブランドを立ち上げて、モデルさんも決まっていたんだけど、急にNGくらっちゃって……イチから探さなきゃいけなくなったの」

「それで……俺？」

「うん。そのブランドのモデルがね、透明感があつて、瞳のきれいな子っていうイメージなの。それですぐに京くんが思い浮かんで……」

「っ……透明感があつて、瞳がきれいって……なにそれ」

急に思ってもないことを言われ、驚く俺とは反対にお姉さんはあっけらかんとしている。

「ふふっ、私は京くんしか思いつかなかったよ。だから

ら、どうかな？ やってみない？」

「んー、でも、俺たぶんモデルとかできないよ。そんな経験ないし、できる気がしない」

「私はそんなことないと思うよ。京くんならできるよ。それに……モデル代、けっこう出せると思うんだ」

「モデル代？」

それを聞いて、つい反応してしまう。

「うん、大きなプロジェクトだし、これは正式なお仕事の依頼だから、報酬たくさん出せるよ」

「報酬、もらえるんだ……っ、でも、だからと言ってできる気はしないんだけど」

「それなら、まずはカメラの写りとかテストだけでも受けてみて、それから決めたらどうかな」

「うん……それなら、受けるだけ受けてみようかな」

「よかった！ それじゃあ、さっそく日取り組んだら連絡するね」

妙に浮かれているお姉さんを見ながら、不安な気持ちちがこみ上げてため息が漏れた。



「あっ、見て。また大きな京くんだよ」

お姉さんが指さす先に、唇の横に真っ赤な口紅のキスマークをつけてリップを片手に持つ大きな自分があった。

『惹きつける赤』

ポスターに書かれた文字を目で追い、気恥ずかし

気持ちちがこみあげてくる。

「京くん、ここに立って」

「えっ、何、急に……えっと、ここ？」

「そう、それで……はい、これ持つて」

そう言つて渡されたのは、ポスターの中の俺が持つているのと同じリップだった。

「ほら、同じ角度で持つて。京くんとデカ京くんの2ショット撮るから」

「えっ、ちよつと……なにそれ」

「ほーら、リップもつと右に傾けて……もう少しだよー」

「っ、ふっ……それ撮影の時、何十回も言われた。

あと『もつと全てを知っているような目で、こつちを見て』つて……あれ、未だに意味がわかんないん

だけど」

「ふふっ、でもよく撮れてるよ。とてもいい撮影だった。京くんのおかげで商品の売れ行きも好調だしね——あ、いいよ、そんな感じ。そのままできて……撮るよ」

カシヤカシヤとお姉さんがスマホで何枚か撮影をし、

「うん、やっぱりモデルがいいよね。これ、京くんとのメッセージ画面の背景に設定しようかな」

そんなことを言いながらはしゃいでいる。

「っ……ねえ、今度はお姉さんが、ここに立って。それでこれ持つて」

「えっ、いや、私はいいいよ。こういうの向いてないから」

リップを受け取ったものの恥ずかしいのか、一向にポーズを取ってくれない。

「そんなことないよ。お姉さんは可愛いし、すごくきれい。ねっ、だからお願い」

日頃、お姉さんが「京くんのこの表情には弱い」と言っている顔をわざと作ってお願いとすると、

「っ……じゃあ、1枚だけね——こう？」

照れながらもポーズを取るお姉さんが可愛くて胸が騒いだ。

「うん、1枚で充分……ほら、もっとリップ、右に傾けてよ。ふふっ、最高の1枚撮るんだから」

「設定完了」

公園のベンチに座り、スマホに表示されている大

きな自分とお姉さんの2ショットを見て思わずにんまりと笑ってしまう。

「っ、それ……なんか恥ずかしいな。すぐに変えてね」

「えー、そんなに照れなくてもいいのに」

飽きもせずに眺めていると、頬にお姉さんの指がそっと触れた。

「京くんって、本当にきれいだね。肌だけじゃなくて、全部——あのさ、さっき言ってた売れ行き好調って話、本当なんだよ。『KYOって、誰』って問い合わせもたくさんきてて話題になってるし」

「あー、うん……妹からSNS見せられたよ。『お兄ちゃん、すごいね』って言われた」

「妹さん、高校生だったよね？ もし興味あればウ

チのブランドの商品使ってみてほしいな。今度渡してももらえる？」

「っ、本当に！？ うん、妹すごい喜ぶと思う。

興味はあるだろうけど、そういうの買う余裕ないから」

「京くんって、妹さん思いで優しいね……あ、優しいのは前から知ってたけど」

ふんわりと柔らかく笑うお姉さんがきれいで見惚れていると、それが急に真面目な顔つきに変わった。

「あのね、ブランドのチーフディレクター、撮影の時に会ったの覚えてるよね？ チーフが『また京くんにモデルをお願いしたい』って言ってたの」

「えっ、また？」

「うん、それにね、ブランドのイメージモデルとして専属契約の話も出てるんだ」

「っ、専属契約……って何？」

「今回の広告のモデルみたいに新商品が出たらまた撮影があったり、その商品のPRイベントにも出てもらったり、あとはウチの会社、定期的にメイク講習会を開いてるから、そこに出席してもらいたいし、モデルって言っても、けっこうやるのがいっぱいあるんだよね——あ、それに京くんをモデルに起用したことで、メンズ化粧品の話も本格的に進みそうだし」

「へえ、そうなんだ……」

突然の話に、全くついていけないとお姉さんはしっかりと目を合わせ、俺の両手を握った。

「これはまだ仮の話だから、しっかりと詰めていくのはこれからになるけど、もし本当にそうなった場合……あの仕事はもうやめないと——でもそれ以上で安定した収入は得られるから」

そう言われ、ハッとした。

「つていうか、俺がイメージモデルになるってリスクーなんじゃないの？俺と専属契約とか、絶対にやめた方がよくない？」

「それは大丈夫。会社も私も京くんのこと守るから」
「守るって……なんか俺、お姉さんに守られるの、かつこ悪い……」

「かつこ悪くなんかないよ。京くんはこれまで妹さんのために頑張ってきたんだから」

「んっ、実際は叔父さんと叔母さんのお世話になり

っぱなしだったけど……」

「妹さん思いで優しい京くんだから、自分のことはいいって全部妹さんを優先してきたよね。でもね、京くんだって、まだ19歳なんだよ。まだまだたくさんの可能性を秘めてるのに、『自分なんか』って、諦めてほしくないし、捨ててほしくないの……っ、これは私の勝手な希望だけだよ」

握られた手からお姉さんの体温が伝わってきて、とても優しい温度に泣きそうになる。

「っ……ありがとう、そこまで考えてくれて。俺、自分のことを考えるのに慣れてないから、まだよくわからないけど……でも、ちゃんと考えて考えて、それで答えを出したい。それまで待っててもらえる？」

「もちろん。これからどうしたいかたくさん考えて、京くんがどうしたいか決めたら教えて」

「うん、本当にありがとう」

（俺がどうしたいか……今までは妹を守るってことしか考えてなかったけど）

目を上げると、お姉さんが優しく微笑んでいる。

思わず繋がれていた手を握り返すと、初めて会った日に繋いだ時よりも温かく感じるけど、やっぱり小さくて華奢な手だった。

（この人を守りたい）

素直にそう心に思い浮かんだ。

（お姉さんは特別で大切な人——……たぶん俺、この人のことが好きなんだ）

でも、今のままじゃ守れないし、こんなことを言

う資格がないのもわかっている。

（でも、いつか必ず……そのために自分がすべきことをちゃんと考えていかないと……）

妹の他に守りたい存在が増えたことを感じながら、小さな手をもう一度しっかりと握った——……。

おわり